北里柴三郎に学んだ優れた研究者（3）野口英世

野口英世 博士
【提供】公益財団法人
野口英世記念会

野口英世は、1876（明治 9）年福島県会津の猪苗代町の貧しい農家に生まれました。幼い頃、母が小川で洗いものに行っている間に囲炉裏に落ちて、大やけどをしてしまい、指が握ったままくっつき動かなくなってしまいました。そんな子を不憫に思った母は、貧しい生活でしたが英世を学校に行かせてくれました。英世も学校で一生懸命勉強しました。英世が自分の左手のことや、 将来の不安について書いた作文を読んだ先生や生徒が協力してお金を出し合い、 固まった指を五本に切り離す手術を受けさせたことで指が動くようになりました。

その後、医師になって恩返しをしようと福島県の猪苗代高等小学校を卒業すると、医術開業試験の受験資格を得るために渡部鼎という外科医が会津若松で開業する医院に住み込みで働き、その間受験に備えて独学しました。1896（明治 29）年 9 月、野口は医術開業試験を受験するために福島から上京しました。同年 10 月、医術開業前期試験にみごと合格しました。さらに野口は、翌年の医術開業後期試験に備えて、医術開業試験の予備校として湯島の済生学舎に学びました。そして 1897(明治 30)年 10 月の試験に合格し、晴れて医師免許を取得し、順天堂医院の雑誌編集の職を得て勤務しました。野口がある日、雑誌分類作業をしていた時、北里柴三郎が主宰する細菌学雑誌に発表された論文に目が止まり、読んでみると、おどろいたことに、世界初の赤痢菌発見という画期的な研究を発表したのは、志賀潔という伝染病研究所の助手であったことでした。野口と同じ助手の身でありながら、志賀潔が世界的な業績を挙げたことに驚き、これが野口の研究者魂に火をつけたのです。そして、野口は志賀が助手を務める伝染病研究所に憧れを抱き、北里が率いる伝染病研究所への入所を志願し、助手見習いになっていくのです。野口は、大学はおろか高等学校さえ出ていません。そこには、東京大学医学部を頂点とする学閥社会を批判する北里の、学歴や血縁を重視するこれまでの社会通念にとらわれない能力主義に基づく人材活用の考え方がよく現れています。1899(明治 32)年 4 月には、野口は助手見習いから、正式に助手になりました。ちょうどそのころ、アメリカのジョンズ・ポプキンズ大学の病理学教授サイモン・フレクスナー一行がフィリピンのマニラに駐留するアメリカ陸軍兵士の間に蔓延した赤痢の調査に赴く途中、わざわざ日本に立ち寄りました。その理由は、赤痢菌を発見した伝染病研究所の志賀潔と指導をした北里所長を表敬訪問し、2 人から赤痢菌の研究状況を学びたかったからなのです。北里は、このフレクスナー教授の依頼を快諾しました。野口は入所当初から「アメリカで研究をしたいと周囲に公言していました。そのことを伝え聞いていた北里は、フレクスナー教授が伝染病研究所内を視察する際の通訳係に英語が堪能な野口を抜擢し、野口にフレ

クスナー教授の智恵を得る機会を与えたのです。事実、それが縁となって、野口は翌年、ペンシルベニア大学に移籍したフレクスナー教授の下で研究することになるのです。
この野口が横浜開港検疫所の医官補となり手がけた最初の大きな仕事は、日本でのペストの水際対策です。1899(明治 32)年 6 月東洋汽船の大型客船「亜米利加丸」の船内で原因不明の伝染病が発生し、船は横浜港に入港しました。野口は、直ちに船に乗り込み、患者を診察しました。その結果、ペストの可能性が高いと診断し、患者から採取した血液と排泄物からペスト菌を確認しました。野口の的確な診断と迅速な隔離が、日本でのペスト流行を食い止めたのです。その後、中国でもペストが流行り、野口も派遣され、大いに貢献しました。中国から帰国後、野口は、北里にアメリカのフレクスナー教授の下で学びたいと、兼ねてからの希望を伝えました。北里は、野口の希望に応えてフレクスナー教授に野口を助手として使って欲しいという内容の紹介文を書きました。野口は、1900（明治 33）年 12 月、野口は北里がフレクスナー教授宛にしたためた紹介状だけを頼りに、横浜港から一路アメリカサンフランシスコに向かいました。
この時、ペンシルベニア大学医学部では、新たな助手を雇用する予定はありませんでした。しかし北里の推薦状とフレクスナーの温情あふれる人柄が幸いし、野口はフレクスナー教授の私設の助手になることが許されたのです。
フレクスナー教授から与えられた研究テーマは、毒蛇でした。フレクスナーと野口は、共同で「蛇毒の研究について」と題する研究を発表し、この時、野口は発表の際に行われた公開実験（デモンストレーション）の助手を務めました。これが野口英世が世界の研究者の耳目を集めた最初でした。その後、野口は、梅毒スピロヘータの研究に本格的に取り組みました。野口は、次々と画期的な新発見を発表し、「魔法の手を持つ男」として野口の名は世界的に知られるようになりました。なんと 1914（大正 3)年と 1915(大正 4)年と 1920(大正 9)年と 3 度のノーベル賞生理学・医学賞の候補にも上がる偉業を果たしたのです。
その後、野口は黄熱病の研究に精力的に取り組みました。黄熱病は、ネッタイシマカを媒介にして黄熱ウイルスによって感染します。熱帯アフリカならびに中南米の感染症です。黄熱病に感染すると 4、5 日の潜伏期間ののちに突然発熱し、頭痛、嘔吐、下痢などを発症します。さらに悪化すると吐血、黄疸などを引き起こし、４～5 割が死亡してしまいます。野口は、この黄熱病の原因究明のために、1918（大正 7）年に南米エクアドル、1927（昭和 2）年には、西アフリカ黄金海岸（現在のガーナ共和国）に赴き、感染地で黄熱病の研究に熱中しました。そして、研究の最中の 1928(昭和 3)年 5 月 21 日、黄金海岸のギニア湾を臨むアクア市で黄熱病に罹患し、帰らぬ人となりました。日本の千円札の肖像画となった、北里柴三郎と野口英世。2 人は、同時代に生きた細菌学者として互いに認め合い敬意の念を抱きながらも、対照的なった人生を選択し、それぞれの道を切り拓いて行きました。北里は日本に恩返しをするためにドイツから帰国し、我が国の感染症学の発展と後進の研究者の育成に尽力しました。対して、野口は、北里の推薦状を頼りに単身渡米し、世界各地に雄飛して感染症と闘い続けたのです。